恩納ノロの辞令書をめぐって

恩納村史「歴史編」専門委員 城間 義勝

現在、恩納村の各字（各区）では、1年を通して様々な村落祭祀が行われています。かつて、これらの村落祭祀は、ノロと複数の神人（かみんちゅ）によって執り行われました。今回はノロという神女の歴史や性格を紹介しつつ、恩納ノロの辞令書についてみていきたいと思います。

【ノロとは】

ノロという神女はグスク時代に発生したといわれています。按司（あじ）という権力者のウナイ（女きょうだい）として、按司を霊的に守護すると同時にその支配地域の最高神女として祭祀を司（つかさど）りました。按司とノロにおける地域支配体制は、琉球王国が成立した後もしばらく続きましたが、尚真（しょうしん）王の宗教改革（15世紀末頃）によって聞得大君（きえおおきみ）を頂点とする神女組織に組み込まれました。そして、地方村落の拝所から国王の長寿と繁栄、間切役人と一般農民の守護と果報、農作物の豊穣などを祈願しました。

1713年に成立した『琉球国由来記』によると、沖縄本島の510の村落に対し、ノロが240人いました。単純計算すると、2つの村落に1人の割合でノロがいたことになります。

【恩納間切のノロ】

1673年、金武間切から4カ村、読谷山間切から8カ村を分割し、計12カ村をもって恩納間切が創設されました。恩納間切には、クージヌール（公儀ノロ）という首里王府から公認された3人のノロと、シマヌル（村ノロ）という王府非公認でありながら村落レベルでは公的な性格を有する2人のノロがいました。5人のノロは、表1のように村落を分担して祭祀を司りました。『琉球国由来記』には、ノロ以外に根神（ねがみ）や居神（いがみ）という神役が山留（やまどうみ）、五月・六月ウマチー、年浴（としあ）み、柴差（しばさ）し、ミヤタネ（種籾（たねもみ）の生育祈願）、カママーイ、芋祭（いもまつ）りなどの祭祀に参加していたことが記されています。

公儀ノロ	恩納ノロ	恩納村・瀬良垣村
	山田ノロ	読谷山（山田）村・谷茶村・冨着村・仲泊村・久良波村
	真栄田ノロ	真栄田村・塩屋村・与久田村
村ノロ	名嘉真ノロ	名嘉真村
	安富祖ノロ	安富祖村

表1 恩納間切創設時におけるノロの祭祀管轄

【ノロの辞令書】

琉球王国時代、ノロが就任する際は、首里王府から辞令書が発給され、役人としての地位が与えられました。しかし、羽地朝秀（はねじちょうしゅう）が摂政（せっせい）（首里王府の最高職）に就任すると、祭政一致の体制から脱却し、新しい王府機能を確立させるため、1667年以降は高官や重職にのみ辞令書が発給され、ノロを含めた役人たちへは辞令書が発給されませんでした（『球陽』巻6、尚質王20年の条）。辞令書がもらえなくなったとは言え、ノロが代替わりし新たに就任する際は、首里王府からの許可が必要で、役人としての性格は王府崩壊後まで続きました。表2は、現在、沖縄本島及び周辺離島で確認されているノロの辞令書になります。

	辞令書の記述情報		備　考			
	発給年月日	島・間切とノロ名	現在の市町村字名	原本	写本	写真
1	万暦9(1581)年4月6日	越来間切の恩納ノロ(注)	うるま市東恩納		○	
2	万暦12(1584)年5月12日	金武間切の恩納ノロ	恩納村恩納			○
3	万暦13(1585)年5月15日	東風平間切の岸本ノロ	八重瀬町世名城		○	
4	万暦29(1601)年11月9日	読谷山間切の座喜味ノロ	読谷村座喜味			○
5	万暦33(1605)年9月18日	今帰仁間切の中城ノロ	今帰仁村諸志			○
6	万暦35(1607)年7月15日	今帰仁間切の具志川ノロ	本部町辺名地	○		
7	天啓2(1622)年10月1日	羽地間切の大ノロクモイ	名護市仲尾		○	
8	天啓5(1625)年4月20日	羽地間切の屋我ノロ	名護市饒平名	○		
9	隆武7(1651)年10月23日	中城間切の島袋ノロ	北中城村島袋	○		
10	隆武8(1652)年2月5日	今帰仁間切の中城ノロ	今帰仁村諸志			○
11	順治10(1653)年8月28日	久米島・具志川間切の具志川ノロ	久米島町具志川		○	
12	順治15(1658)年7月28日	金武間切の恩納ノロ	恩納村恩納			○
13	順治18(1661)年1月13日	中城間切のよきやノロ	中城村添石		○	
14	康熙2(1663)年8月15日	読谷山間切の城ノロ	読谷村座喜味			○

表2 沖縄本島及び周辺離島で確認されているノロの辞令書